
全ての物が未来から過去へ

mental

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ての物が未来から過去へ

【Nコード】

N9258F

【作者名】

mental

【あらすじ】

西暦三千五百一年一月一日（せいれきさんぜんごひゃくいちなんいちがついちにち）、文明の発達により日本は何一つ不自由なく暮らせる国となっていた。そんな国で暮らしていた一人の少年、海賀^{かいがし}俊^{ゆん}は親友の恵崎葵^{えさきあおい}の家に遊びに行くのだが、葵と一緒に見たテレビでは信じられない内容が放送された。それは「時代を西暦千年まで戻す」という計画の説明で……。

01:「これで焦らない奴は相当大物だよな」

せいれきさんぜんごひやくねんじゅうにがつさんじゅういちにち
西暦三千五百年十二月三十一日、日本。文明が進歩し便利な道具
が行きわたり、人間が何一つ不自由なく何もせずとも生きられるよ
うになった時代。

家事など身の回りのことは機械がやり、事務や商売など様々な仕
事も機械がするようになった。することのなくなった人間は暇な時
間を過ごしていた。そんな世の中になったせいも金という観念は廃
止され何でも好きなものも手に入るようになった。

そのせいも自然と犯罪などもなくなり、人々は恐怖という感情す
ら感じたことがない。医療も進歩したせいも、今や病気という言葉
すら知らない人間の方が多い。

そんな、まるで楽園のような世界の中で、一人の少年が生きてい
た。名前は海賀^{かいが}俊^{しゅん}。他の人間と同じように何一つ不自由の無い世
界で、何も考えず、自分では何もせず、ただ暇な時間を生きていた。
まさか明日、大変なことが起こるとは思いもせず。

「今日は葵と約束があるんだよな」

俺こと海賀 俊は友達である恵崎^{えひさき} 葵^{あおい}、ちなみに女みたいな名前
だが男だ、の家へ急ぐために、ホバーボードの速度を飛ばしていた。
と言っても急いでいるわけではないが。

ホバーボードというのは簡単に説明してしまうとその名の通り浮
いている板で、本気を出せば何百キロも速度が出せるほどの乗り物
で、昔でいう自転車とかいう乗り物と同じ役付けた。

乗り物の中で一番普及率が高く一家に一台はある乗り物で、手軽
さと出せる速度で人気の乗り物だ。そんなに速度を出して事故した
りしないのだろうかと思われるかもしれないが、ホバーボードは目
的地を入力するだけで走る自動運転で、他のボードにぶつからず走
るようにインプットされているため事故は一件もない。

今日は西暦三千五百一年一月一日、元旦の祝いを友の家でしよう
と俺は葵の家に向かっているという訳だ。と言っても特に特別なこ
とはやらないが。

「ふう、ついたな」

ボードに乗り込んで一分も経たない内に葵の家に着した。ボ
ードから飛び下りて鍵を閉めると俺は葵の家の扉をノックする。する
と俺以外誰もいないのに扉が勝手に開いた。だが俺はそれに驚くこ
となく家の中へお邪魔する。別にこれは驚くべきことではない。

「やあ、俊くん。思ったよりも早いね」

廊下の突き当たりにあつた扉を開けると、葵が床に転がって煎餅
を齧りテレビを見ながら出迎えてくれた。これが人を出迎える態度
なのか。

そう思った途端俺が部屋に入ってきたときに開けた扉が勝手に閉
まり、俺の目の前に座布団とお茶が現れる。俺はその座布団に座つ
てお茶を一口啜った。なかなか良いお茶だ。

誰もいないのに扉が開いたりしまつたり、お茶と座布団が現れた
り、何が起こっているのかというと、家の所有者は自分の所有して
いる全てのものを念じるだけで動かしたりできるのだ。要は自分の
家でテレビ付けと念じるとテレビが付き、飯食べたいと念じると料
理が出来る訳だ。

「さあて、それじゃあ何する？」

「何するって言っても、別にすることなんてねえだろ」

「それじゃあ暇つぶしにトランプでもしようか」

葵がそう言ったその瞬間、彼の手にトランプが現れる。何もして
いないのにトランプが高速でシャッフルされたかと思うとそのうち
の半分が俺の元へと飛んできた。

「ババ抜きでもしようよ。僕、結構ババ抜き強いから」

葵がババ抜きが強いのは本当だ。確か負けたことが一度もないら
しい。カードを捨てている葵の顔は真剣だ。これはなかなかの強敵
のようだ。

頑張らなくてはと思いながら自分の手札を見ると、捨てられるカードが殆どなかった。新年早々俺は運がないようだ。

勝負は葵の圧勝。開始から五分足らずで勝負の結果が付いてしまった。流石自分で強いというだけのことはある。

「勝ったのはいいけど、別に嬉しくないや」

「お前そんなに勝ってるのか？」

「うん、何時も暇な時はババ抜きやってたし」

そんなお前が羨ましいよ。そう思いながら葵に何をするか聞くとテレビを見ると彼は答えた。そういえば、勝負中ずっとテレビが付きっぱなしだったのか。

丁度良くお気に入りアニメがやっていたので、テレビを見ようかと思ったその時だった。

「番組の途中ですが、臨時ニュースをお届けします」

突然チャンネルが変わりニュースが始まってしまふ。でたよ、様々な番組の敵、臨時ニュース。

適当に聞き流そうかと思ったのだが、そのニュースで発せられた言葉は信じられないものだった。

「文明の発達で現在我が国は不自由なく暮らしを送っていますが、そのせいで自分で考えて行動する力が現代人から無くなっていくことを危険に思った政府は、時代を過去に戻すという計画を立てた模様です。具体的にどうということかという点、身の回りの物や道具を過去の、西暦千年の平安時代まで戻し、現代人に自分の力で生きていく力を持たせる計画ということらしいですが、詳細は不明です」

分かりにくいのが、俺には何とかその言葉の意味が理解できた。要は身の回りの物や今の生活を約二千五百年前の西暦千年まで戻す、という計画を実行するようだ。

確かに今の日本は不自由なく暮らせすぎて、自分で考えて生きる必要がない世の中になっているし、そうすれば自分で考えて生きれ

る人間になるかも知れない。だが、そんなことは普通無理だし、例えるなら温室育ちの坊ちゃんを猛獣の生息するサバンナに放りだしたらどうなるだろう。それと同じくらいこの計画は無茶だ。

どうなっているんだと焦る葵に戸惑いを隠せずに汗をかいてきた俺、暫くその状態が続く。まあ落ち着こうとようやく少し落ち着きを取り戻したとき、突然俺達の体は光に包まれた。

01:「これで焦らない奴は相当大物だよな」(後書き)

あまりにごちゃごちゃすぎて読者の皆様は何が起きたか分からないと思います。申し訳ありません。

要は自分の身の回りの物や生活が平安時代になってしまいう訳です。しかもそれを体験するのは現代人ではなく自分では何もできない未来人。というお話です。

幼稚な文章で綴るあり得ないお話ですが、どうぞ最後まで楽しんでもらえたらなと思います。

というか結構眠いので、文章が手抜きぎみだったり無茶苦茶だったりしていると思います。というかしてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9258f/>

全ての物が未来から過去へ

2010年11月23日06時20分発行